

〈 書評論文 〉

「いじめの社会理論」の射程と変容するコミュニケーション

内藤朝雄『いじめの社会理論 ― その生態学的秩序と生成と解体』
(柏書房、2001年)

向井 学

1. はじめに

いじめ問題は多く論じられており、研究の方法や対象もさまざまである。滝の分類方法を借りれば、大きく事例研究(秦 1986、橋本 1999)・質問紙調査研究(山本 1985、滝 1992、竹川 2004、新保 2008)・言説解釈研究(伊藤 1996、徳岡 1988、間山 2002)の3つに分類できる(滝 1992)。これらのうち事例研究は、性格や心理といった個人原因説におおむね依拠しており、質問紙調査研究は個人の集団における相対的特性にその原因を求めがちである。また言説解釈分析の中では、「いじめ」という言説が作り出す現象そのものに注目する。そのような先行研究の中で、本書はどちらかといえば個人原因説に根ざした理論的展開がなされているが、その個人的原因を学校(学級)などの特殊な集団において生じる心理的欲求においたという点で、それらのどの研究にも見られなかった理論展開がなされている。

しかしながら、著者の主眼はどのような集団において「いじめっ子」が生まれるのかについてであり、集団においてどのような人間関係がいじめを生み出すのかではなかった。つまりいじめを誘発するような集団が存在すれば自動的にいじめっ子が生まれ、いじめが生じるとしていた。評者は、本書が刊行された2001年以降、近年のメールやネット(SNSやブログなど)を通じたコミュニケーションが日常的になった若者のあいだで、こうしたコミュニケーションの変化がいじめに何らかの変化を与えているのではないかと考える。なぜなら「いじめたい」という心理的欲求が集団の特徴によってのみ規定されているとすれば、近年言われるようになった、「イジリという名のいじめ」がうまく捉えられないと考えるからである。そこで本論では、近年言われるようになったイジリ、そしてそれを支える「キャラ」という概念を軸に、本書の言ういじめを再論することを目的とする。

2. 本書の内容

本書はいじめがどのようなメカニズムで起こるのか、ということを経験的に著した本であり、理論的展開部分（第1章～第5章）、理論応用部分（第6章～第7章）、いじめ解消に向けた提案部分（第8章～第9章）に大別される。特に重要な部分は、第2章、およびその心理学的補足がなされる第5章である。以下そのことを踏まえながら本書を概説する。

第1章では、本書の理論に通底する「中間集団全体主義」という概念が提出される。その定義は「各人の人間存在が共同体を強いる集団や組織に全的に埋め込まれざるをえない強制傾向が、ある制度・政策的環境条件のもとで構造的に社会に繁茂している場合に、その社会を中間集団全体主義社会という（p. 21、傍点評者）」ものである。

第2章では既存のいじめ研究が批判的に検討されたのち、本書の基幹理論としての「IPS（Inter-Intra-personal Spiral）理論」を利用しながら、 β -体験構造が解説されている。 β -体験構造とは、 α -体験構造（無条件的な自己肯定感覚を得るための（自己認識性能を有した）原的充足に関わる意味解釈の構造）において、原的充足のための（恣意的な・個人的な）認知-情動図式が崩壊し、その結果生じる「オリジナルの欠如」の埋め合わせとしての（無条件の自己肯定が反転した）自己の全能感を、外部（他者・対象）に求める意味解釈の構造である。 β -体験とその体験の連続によって生み出される社会秩序とが、その体験そのものでは「オリジナルの欠如」から生じた〈欠如〉（後述）を埋め合わせるには不完全であるという事実を媒介されて、さらなる／次なる〈欠如〉を埋め合わせる体験を、 β -体験に求める。これによって、心理的欲求（〈欠如〉）・行為（全能希求体験）・行為の集合と結果としての社会秩序・社会秩序における（条件付きの）自己肯定・新たな心理的欲求というスパイラルが生じるのだという。この心理的欲求から新たな心理的欲求に至るスパイラル体験の理論的説明がIPS理論である。多くの人々は、様々な環境要因の中で、「オリジナルの欠如」と充足との間を生きている。この「オリジナルの欠如」から〈欠如〉へと至る要因は多岐にわたるが、とりわけ（a）他人からの迫害、（b）自由を奪われる拘束、（c）べたべたすることを強制されること、すなわち他人との心理的距離の不釣り合いな、あるいは強制的な密着、（d）全能感とのすり替える誤用、の4つの要因が重要な位置を占める（p. 63）。重要なことは、いじめの場としての学校においては、この4つの要因すべてがそろっていることである。

第3章では β -体験の場の事例として学校が取り上げられている。中間集団全体主義としての学校共同体（あるいは学級・学年共同体とも捉えられる）において、その強制的な過剰接触、および「仲良し」の強制によって、生徒たちは「こころ」に自由のない感情奴隷（p. 132）となることが指摘される。そのうえで、今すぐできる対策として、学校への警察権力の介入と学級制度の廃止を提案する。

この第1章～第3章の内容は「まえがき」に記されているとおり、本書の内容が圧縮されたものであり、続く第4章においてIPS理論を、第5章において〈欠如〉からその充足である全能感の具現のメカニズムを、より詳しく論じている。IPS理論は前述したように、全能希求が相互行為の中で具現化され、それによってさらなる／次なる全能希求がなされるスパイラル構造である。重要なことは社会的な相互行為の中でしかその全能感は具現されないことである。また〈欠如〉とは、「（具体的な）なものかの欠如ではなく、何ものかが何ものかとして成立する体験世界のオーガナイゼーション自

体が腐食し、すべてが無限の穴に呑み込まれていくような不気味な感覚 (p. 184-185)」である。この〈欠如〉は「オリジナルの欠如」に根ざしているが、この「オリジナルの欠如」がどのようなものであるのかについて、著者はラカンやコフォート、ホッパーを用いて論じている¹。また、ストロロウの体験構造・具現の概念を用いて、意味解釈の構造としての体験構造を客観的な出来事や対象・象徴といったものによって、具体化したり、ドラマ化したり、象徴的に変形したりすることを具現とし、この具現によって体験構造は維持されるとする (p. 180)。さらに具現のためにかたどられる具体的な何かの形態を〈具象〉とする (p. 180)。この〈具象〉はいじめの場において2重3重に折り重なる全能具現となる。つまり、①やることの全能具現と、②集まることの全能具現、すなわち「みんなのノリ」という具現、③物理的空間を覆い尽くす全能具現、空間占有感覚による全能具現、という3つの具現が折り重なり／組み合わせたり、いじめがなされる (pp. 201-202)。またほとんどの社会現象は、場の情報、集団的全能具現の心理的必要性、利害構造という3つのファクターによって、その攻撃性や迫害性は決定され、その中で最も重要なファクターは利害である (p. 203)。

第6章では、利害と全能感との接合モデルが提示される。この章で通底するのは、人は合理的選択システムに多かれ少なかれ依拠しているものの、それだけで動いている社会的メカニズムはほとんどなく、合理的選択メカニズムと他のメカニズムとの有用な接合モデルを如何に組み立てるか、という問いである (p. 209)。今までの議論に即して言えば、これは全能具現と合理的利害が一致する(接合する)モデルにおいていじめが発生するということになるのだから、その接合を切り離すための社会制度を考えるためには、そうしたモデルを提示する必要があるという。また、第7章では、広い意味ではいじめと解釈することもできるDV(ドメスティック・バイオレンス)の研究を事例にして、その全能具現と合理的利害の一致、また顕在化した問題だけで研究を進める問題点を指摘する。つまり多くのDV加害者は計算ずくで悪ノリし、ことが大きくなならない範囲でうまくやっているのであり、利害に応じて全能具現を伸縮させているのであって、損得を考えずに暴力に走ってしまう者は一部であるのだから、その一部だけの問題として研究を進めるのではなく、潜在的な「うまくやっている」加害者のことも想定したうえで、DV研究が進められなければならないとする。

第8章・第9章では自由な社会の構想として、著者の考える中長期的な提案が示される。学校を解体し、「教育チケット」制にして町の自動車教習所を選ぶように自由に学習サポート団体を選べるようにする。その上で義務教育は「最低限の知育(日本語・算数・法律)」に特化させ国家試験制に

1 しかし、なぜ「オリジナルの欠如」が生じるのかという問題については、本書では論じきれていない。工藤宏司は本書に対する書評の中でそのことを指摘したが、著者が主張した「構築主義無能論 (p. 142)」を批判することに終始してしまい、結果的に他の書評でのリプライにおいて、著者に反論されている(工藤：2003、秦・内藤：2004)。しかし工藤のこの指摘は非常に重要で、著者が無条件的な自己肯定感覚について、「それは成人後も…様々なメカニズムが混在するなかに紛れ込んでいるので、それを取り出すのは困難である (p. 61)」としている以上、その反対の「オリジナルの欠如」への提言が、「親がきちんと愛してやればいじめっ子は生まれない」といった従前の「規範的提言」(工藤：前掲)であったとしても、著者は「それは間違っている」と完全に否定することはできないはずである。このような視点に立てば、本書においていじめの根本的原因は解明されておらず、いじめの理論構築はなされていないという指摘もできる。しかし評者は、そもそも無条件的な自己肯定感覚は、希求はされるけれども存在はせず、人は常に「オリジナルの欠如」の状態であるという立場に立ち、その解消の方向として一方の極には著者が言うような全能感が存在し、他方の極にはルサンチマン的な(ある意味で否定的・卑下的な)自己肯定感覚が存在しており、多くの人々はその間を、ふらふらしながらもその両極に至ることなく生きているのではないかと考えている。したがって「オリジナルの欠如」が生じる原因については、これ以上の言及は必要ないと立場をとる。

し、試験に通らない場合は無制限に義務教育チケットを配布する。一方で権利教育チケットを親の年収に反比例するように配布し、機会の平等を保護しつつ、「学術系」「技術系」「クオリティ・オブ・ライフ系²」の権利教育を学習サポート団体に委譲する。こうすることによってクラブ活動も含めた学校教育のかなりの部分は外部（市場）に委ねられる。被教育者はよりよい教育が受けられ、かつ嫌なことが起った時に他へ移動する自由が生まれるというわけである。

3. 近年の若者のコミュニケーションの変化

3-1. キャラを前提としたコミュニケーションの広がり

ここ約20年、つまり本書の発刊の概ね前後10年の間に、若者を取り巻く環境は大きく変化した。多様な消費を支える市場の成熟や情報の拡大や、それら市場の情報を手に入れるためのツールとしてのインターネットやケータイの普及。それらの普及にともなうコミュニケーション参加への簡易さの拡大と、簡易さがもたらすコミュニケーションネットワークの拡大、および深化。例えば土井は若者のコミュニケーションの変化はどのようにもたらされたのかという視点から、価値観が多様化した社会を前提としたコミュニケーションの実践において、ケータイの普及や個性尊重の精神の広がりを踏まえながら、キャラという「表層演技」が、アイデンティティを構築するコミュニケーションにおいて必要であることを論じている（土井 2009）。

このキャラという考え方は、近年のいじめを考える上でも、取り上げられるキーワードとなっている。なぜなら上述したような社会変化のなかで、若者のコミュニケーションが変化し、それに伴っていじめの対象が身体的特徴や性格・学力などにおける特徴、つまりその集団において特異性を有している者から、コミュニケーション能力の弱者へと変化したからである。例えば森口朗はスクールカースト（後述の土井のいうカーストと同じ）の優位性を決定づけるのは、高校ではその高校の偏差値の違いによって学力や喧嘩の強さといったものが未だそれを決定づける可能性があるとして一部例外を示しつつも、小・中学校では学力や体力ではなく、その最大決定要因はコミュニケーション能力だと考えられていると主張する（森口 2007：p. 46）。また相原博之は、「いじめられキャラ」がキャラであるがゆえに、入れ替え可能で、だれしがいじめられる可能性を持っていることを指摘する（相原 2007：p. 134）。また、こうしたキャラを前提としたコミュニケーションの在り方は、若者に支持される小説などの創作にも見出すことができる。例えば2004年にヒットした『野ブタ。をプロデュース』（以降『野ブタ。』）では、いじめられっ子だった編入生の小谷信太が周囲とのコミュニケーションの中で「いじめられキャラ」に変化することにより、教室内での立場が大きく変化する過程が描かれている（白岩玄 2008）。

また、キャラを考える上で「イジる」が、もう一つキーワードとなる。『野ブタ。』では、変化した後の小谷信太を「いじめられキャラ」と表記されているが、その描かれる内容は「イジられキャラ」である。この「いじめ」と「イジリ」は、似て非なるものである。『野ブタ。』に例えれば、前者が編入してから一カ月余りの間の小谷信太であり、後者がプロデュース中、あるいはプロデュース後の小谷信太である。

ではイジリといじめが全く別物かといえ、そういうわけでもない。第三者からみれば、イジりの

2 芸術やスポーツ、旅行など、生活を楽しむための教育。従って、試験などはない。

中にもいじめと受け取れるものは多くある。またイジリから始まっていじめに至る過程も存在する。しかし両者が決定的に違うのは、仲間意識がどこにあるかである。このような視点に立ったうえで、以降、キャラ・イジリを論じていく。

3-2. 「キャラ」とはなにか

まず本論におけるキャラとは何かを明らかにしていく。キャラとは、端的には表面的な役割演技と捉えて問題ない。けれども多少なりとも役割演技とは異なる部分があるからこそキャラという新しい用語が使用されているのであるから、最近の言説からその定義を確認したい。相原(2007)は現代の若者のコミュニケーションがキャラを前提になされていると論じた初期論者の一人であるが、なぜそうしたコミュニケーションにキャラという前提が必要なのかを最初に論じたのは土井(2009)である。ここでは、土井の論を手助けにしながら、キャラとは何か、またなぜ若者の間で「キャラ化」が進んでいるのかを論じたい。

土井によれば学校(学級)コミュニケーションにおけるキャラ化は1980年代後半からはじまる。これは、学校が画一的な教育から、「個性の重視」へとシフトした時期と重なる。これは伊藤の次のような分析によっても明らかにされている。70年代・80年代において生徒たちは、向学校的／非学校的の違いはあれど、学校の求心力を中心にしてその文化は形成されていた。しかし、90年代以降、①学校教育の長期化(高等教育機関や専門学校への進学率上昇)を伴いながら、学校が単なる「生活の場」に変質したこと、②アルバイトの一般化と若者の消費市場の拡大、それに並行してポケベル、インターネット、ケータイなどのパーソナルメディアの普及による学外コミュニケーションの可能性が拡大したことによる、コミュニケーションの場としての学校の必要性の減少、の2点を挙げ、学生の気質の変化として「若者化」、コミュニケーションの洗練化、アイデンティティの拡散という3つをあげている(伊藤 2002)。土井はこのような「若者化」に伴う価値観の多元化によって、「これが正しい」と言えるような価値基盤が無くなってしまったことにより、社会の物差しを取り入れた抽象的な他者が、具体的な他者へと入れ替わることになったと説明する。この抽象的な他者は、自己の行為を肯定するための精神的な足がかりであり、それが具体的な他者に入れ替わるということは、常に自己肯定感を得るために他者と繋がっていなければならないということの意味すると言う。

この具体的な他者と繋がる必要性が、コミュニケーションの重要性を高める。コミュニケーション自体は、あまり価値を共有しない他者とはうまく成立しない。しかもコミュニケーション能力は他者依存的な能力であるため、相手によってその評価が大きく異なってしまう。コミュニケーションによって自己が肯定されるのであるから、自然と自身への評価が高い相手を選ぶことになり、結果的に「類友」と呼ばれる同質的なコミュニケーション能力を有したグループが出来上がる。それぞれのグループ間に、その能力の開きがあるとグループ間が、「カースト」と呼ばれる上下関係で分断される。単に優劣が付けられるのではなく、分断されるのである。なぜならカースト間では互いを「圏外」として認識し、交流が生まれにくいからである。コミュニケーションはその場その場によって求められる役割が変化するから、場に合わせたキャラを「空気を読んで」演じる必要が出てくる。卑近な例を挙げれば、同じ友達でも教室で話す時と飲み会で話す時、また、政治の話をしている時と昨夜のお笑いテレビの話をしている時では、求められる会話の質が異なるということである。けれども価値観が多様化したため、他者が何を大切にしているかが分からない状況であり、また個性が尊重されなければならないというメタな規範のみが存在するがゆえに「相手がどのような役割を自分に求めている

るのか」ということを尊重する。そのためさらに、相手の真意を探らなければならない状況が生まれる。そうした相互に探りあわなければならないコミュニケーションに求められる自己／相手の役割を簡素にし、パーソナリティに左右されない表面的な役割演技を、土井はキャラと定義した（土井2009：pp. 12-34）。

ここでいうキャラは従来から論じられているキャラクターとは異なる。例えば北山はキャラクターを整理する中で、「会話の中で話題に上った人の〈キャラクター〉を思い浮かべることで、私たちは話題にされている出来事を「理解」する（「あの人ならそういうこともやりかねない」）。…それはその場にいる者たちの相互行為を成り立たせるいしずえとなる（傍点原文のまま）」と指摘している（北山2000）。キャラクターはパーソナリティに付随するものとして想定されているが、土居の言うキャラはパーソナリティからより独立している。つまり「あのキャラならそういうことをやるだろう」である。そしてこの想像が、コミュニケーションを成り立たせる礎となるのである。したがってここに必要な能力は、その場で、そのキャラにおける、「しそうな」話（や行動）を、どれだけ読み取れるか、あるいは想像できるかであり、こういったことを過剰に読み取る関係を、土井は「優しい関係」と名付けたのである（土井前掲：p. 12）。

3-3. イジる・イジられるというコミュニケーション

こうしたコミュニケーションが日常化する中で、イジリキャラ・イジられキャラというキャラが生まれてきた。『野ブタ。』では、コミュニケーション能力が低く、デブで、いじめられっ子だった小谷信太を、主人公の修二がうまく補佐に回ることによって、見事に愛されるイジられキャラに変身する。小谷信太はいじめられっ子からイジられキャラに変身することによりずいぶんと救われるのだが、それでもいじめと変わらぬ扱いを受けることもある（不良っばい生徒にパシリにされたり、理不尽なゲームの罰ゲームを無理やりやらされたり、プロレス技を（一方的に）かけられたりしている）。もちろんそうした行為に対し、小谷信太は良く思っていない。しかしイジられキャラとしてコミュニケーションの輪を広げた以上、そうしたことも笑顔で、いやむしろ自ら進んで甘受しなければならない。そこから抜け出すためには、『野ブタ。』のように、「やれば出来るキャラ」への転身を目指して不良に絡みに行くという、現実ではかなりハイリスクな行動に打って出なければならないのである。

荻上は木堂椎の小説『りはめより100倍恐ろしい³』を引用しながら、そこに描かれるイジりを、「他人からキャラを固定され、演技続けることを「空気」によって強制されること」と説明する（荻上2008：p. 167）。つまりしたくもない演技を、そのコミュニケーションの中でし続けなければならない状況におかれることといってもよいかもしれない。しかも自分が内心つらいと思っていることは、自分以外には分からない。なぜなら、つらくとも笑顔で演技し続けなければならないからである。

しかしいじめとは明らかに異なる部分がある。それはイジリという行為の中に、仲間意識が存在しているということである。従来のいじめにおいて、その双方の当事者は決して仲間ではない。つまりいじめっ子はいじめられっ子の仲間ではないし、その逆も然りである。けれどもイジリにおいては、その前提に仲間であるという意識が存在するからこそ、イジる／イジられるという関係が存在してい

3 「りはめより」の意味するところは「イジくり」はいじくめより」である。

る。イジられキャラになることによってその仲間の一員としての自覚を持ち、そこでもコミュニケーションにおいて自己肯定感を得ているがゆえに、イジられることに否定的になれない、イジられる者となるのである。森口は独自調査事例の分析から、第三者から見れば単なるいじめであっても、本人がイジられキャラであると主張することによって、そのカーストの仲間であるという認識を保っていることを明らかにしている（森口前掲：pp. 150-153）。

3-4. イジリをどう考えるか

このような昨今のキャラを前提としたコミュニケーション、とりわけイジリを想定したうえで、もう一度著者のいじめの理論を振り返ってみる。著者の理論では、いじめの原因は加害者の「非損害」という利害と全能感の獲得という快樂との一致であり、分かりやすい言葉でいえば「タダでおもしろいことができる」ということである。しかしキャライジリにおいては、その原因はもう少し複雑である。土井の分析に従えば、キャラによってコミュニケーションが円滑に遂行されているのであって、そもそもキャラを否定するわけにはいかない。キャラを否定することは「優しい関係」が構築されたコミュニケーションの否定であり、仲間意識を共有する集団からの離脱を意味する。そのことは自己肯定感を得る場をあらかじめ拒否することであり、新たなコミュニティへの参加という多大なリスクを負うことになる。つまり、非損害という部分では、著者の理論と部分的に一致する。しかし同じ非損害であっても、著者の理論ではその行為、つまりいじめるという行為そのものに損害がないという意味であり、何もしなければ、損害も生じない。けれどもイジリにおける非損害は、「行為（イジリ）をしない事に対する損害」を守るための行為（イジリ）の結果としての非損害であり、イジらなければ「仲間から疎外される」という損害の可能性が想定されている。したがって同じ非損害を想定した行為であっても、いじめとイジリではその動機のベクトルが逆方向である。

また、全能感をもたらす快樂がイジる者に存在するかどうかは疑問である。そもそも全能感の前提となる〈欠如〉が、イジる者の心理に存在するのかが疑わしい。むしろその場の雰囲気をつらわそうと、必死でコミュニケーションしたことが、結果的にイジる者になってしまっただけかもしれない。そこには快樂を求めるような、相手をコントロールしたいというような欲求はなく、ただ、日常のコミュニケーションの延長線上、相手がいつも笑顔で引き受けるキャラの特性にその場の雰囲気を託しただけかもしれない。もちろん『野ブタ。』での「なんちゃって不良くん」たちやプロレス好きの他のクラスの男子のようにそこに楽しみを見つけ、従来のいじめのように、単に「おもしろい」からイジる者になっている可能性も否定はできない。けれどもそこには著者のいじめ理論のように、その当事者間に相互の排他性は見られない。つまり単純ないじめっ子／いじめられっ子という二項対立の図式ではない。むしろイジリによってその集団の一員として自己を周囲に顕示し、そこで行われるいじめの契機を包含したイジリコミュニケーションによって、自己肯定感を得ているのである。そしてそれはイジる者・イジられる者の両方に言えることなのである。

著者の理論においていじめの原因は加害者のみが有するものであった。しかしイジリにおいては、被害者もイジられる者になることを受容しているのである。荻上はマンガ『フラワー・オブ・ライフ』の一部を引用しながら次のように分析する。

「いじり＝キャラ問題」の難しいところは、それが仮に好意的な意図に基づくものであれ、あるポジションへと強制的に位置付けられてしまうことであり、その一方でそれに抗おうとすること自体も、学校空間ではさ

らなるもめ事（いじめ）を誘発してしまいかねない事を、常に多くの人が知っているという点だ。だから多くの場合、そのことは受け入れたうえで、空気を読みながら自己プロデュースを行うことが求められる（p. 214）。

つまり場の雰囲気とうまくこなす手法としてキャラ問題が生じている以上、イジられる者もそのいじめ的な部分を自認し、認めているのである。そしてこのコミュニケーションの「認め」において、仲間内でのコミュニケーションが再帰的に規定され、その規定されたコミュニケーションにおいて、自己を肯定していくという他者との関わり方が、現代の若者のコミュニケーションのあり方なのである。さらにこうしたコミュニケーションのあり方を、昨今のケータイ文化はより複雑にする。

原田は、ケータイを併用することに伴うコミュニケーションの拡大を「24時間いつでもどこでも井戸端会議」と評したが、そのことによって、リアルコミュニケーションで失敗しないために、ケータイメールには即レスし、SNSには足跡を残し、病んでいるブログ友人を励まさなければならない事をルポタージュしている（原田 2010）。ここには2つの問題が含まれている。一つはリアルとオンラインという2つのコミュニケーション空間において、24時間キャラを演じ続けなければならない可能性があるということである。もう一つは宮台の言う「コミュニケーションの二重化に伴う疑心暗鬼（宮台 2009：p. 59）」、つまりリアルとオンラインとのコミュニケーションが異なっていたとしても確かめようがないという点からくる疑心暗鬼を基にしたコミュニケーションの必要性が生じるということである。リアルで仲良くしていても（裏の）オンラインで悪口を言っているかもしれないと疑うからこそ、キャラを前提としたコミュニケーションの中で、リアルの確認をオンラインで、オンラインの確認をリアルで行う、無限のループが生じ、結果的に一つ目の問題をより強く規定してしまうのである。

4. 結論

このようにキャラを前提としたコミュニケーションにおいては、従来の「いじめ」理解の図式が想定したような、「いじめっ子当人が他者をコントロールすることによって快楽を得る」という枠組みだけでは捉えきれない状況が生じている。他者コントロールの欲望が不在であっても、イジりは生じる。例えば、イジる者はイジらないことによって「空気読めない奴（KY）」というレッテルを貼られるのを避けるためにイジる。イジられる者はイジられた事に反発し、「そんなの友だちじゃない」と言ってみたとこで、イジる者同様、KYのレッテルが待っているがゆえに、笑顔で甘んじてその行為を受け入れる。こうしたイジり理解の図式からは、その場その場で多少なりとも、イジる者／イジられる者が入れ替わるような事態も想定されうるが、現実にはコミュニケーション能力、その場の雰囲気を見定める能力に優れたものがイジる者となり、それに劣るものがイジられる者となり、固定化される傾向がある（原田前掲 p. 129、荻上前掲 p. 205、土井前掲 p. 17、森口前掲 pp. 44-46）。そして固定化されることにより、イジりが従来のいじめと変わらぬものへと変化していく可能性も、もちろん存在する。またこうしたイジりは、これまでになかったものというよりは、むしろ潜在的であったものがより顕在化したと理解すべきであろう⁴。けれども本論で重要なことは、近年のコミュニ

4 たとえば、今日でいう「イジられキャラ」のポジションに位置する者は、かつてなら（いじめられっ子だけ

ケーション変化に伴った、新しいタイプのいじめとしてのイジりの顕在化に対して、著者の理論枠組みでは対応しきれないということである。

著者の理論を端的にまとめるならば、加害者は自己の無条件的肯定感の欠如からくる心理的欲求を、他者（被害者）をコントロールすることによって代替的に満たし、そのことによって自己肯定感を得る。この自己肯定感の欠如は強制的に集団（学級）へ加入させられることによって誘発させられ、また、そこでの解決は代替でしかないためにいつまでたっても満たされることがない。この逃れられない集団への加入が加害者の「いじめてやりたい」という欲求を生み出し、その欲求がいつまでたっても満たされない状況を作り出している。それと同時に被害者が加害者から逃れるという行為を、非現実的なものとする。

しかしイジリにおいては、被害者の心理は著者が想定しているほど単純なもの、つまりたまたまの要因（たとえば見た目が悪い、協調性がない、勉強ができる／できないなど）をもった被害者が、加害者の欲求不満解消のための対象になってしまうというものではない。イジる／イジられるキャラを演じることによって自己肯定感を得ているのは、加害者も被害者も同じである。つまり逃れられない集団によって被害者が被害者になるのではなく、自己肯定感を得るがために被害者を甘んじて受け入れているのである。そのことを敷衍すれば、被害者は自己肯定感を具体的な他者、あるいは集団に委ねてしまっている以上、仮に異なる集団に所属したとしても、そこでのコミュニケーションの中で、イジられる者を甘んじて受け入れる可能性があるということである。またイジりにおける加害者の心理も、著者が想定するほど加害的なものではない。その集団において加害者的な役割を演じることが自己肯定感につながるものであり、「被害者をコントロールする私」に自己肯定感を持つのではなく、「集団の中の私」に自己肯定感を得ているのである。

著者の理論においても「集団の中の私」を求めることから、その集団秩序に何の疑いもなく従う加害者（もしくは傍観者や扇動者）が想定されている。けれども被害者はその集団秩序からは、徹底的に排除されており、むしろその排除する快楽（見下す快楽）こそが、〈欠如〉を埋め合わせる代替物として想定されている。しかし今日的な「イジりに内在するいじめ」に見られる「自分たち」は、イジられる者という被害者をも含んだものである。

このように考えれば、イジりを想定するとき、著者の「加害者が被害者を排除することで快楽を得て、その快楽によって心理的欲求が代替される」というスパイラル理論の枠組みは、次のように置き換える必要がある。すなわち、「加害者・被害者は共にイジリという行為によって不安定な自己肯定感の一部を代替するが、やはり代替であるが故に新たな自己肯定欲求から、次のイジリへと向かう」というスパイラル理論である。このように著者の理論を置き換えてから近年のイジりを考えることにより、どのような社会的・空間的条件においてイジリ／イジられキャラが生じやすいのか、またどのような関係性の中でそうしたキャラが構築・維持されやすいのかといったことが、より具体的な事例によって研究を深めることが可能となるであろう。従来のいじめ研究にだけでなく、新しい潮流としてのイジりの研究にも、著者の「(当事者の) 心理的欲求→集団(社会)との関係→心理的欲求」

ではなく) 不良グループの下っ端に位置した可能性もある。彼はグループ内では軽いいじめ程度は甘受しななければならないイジられキャラであったとしても、一応は不良グループに所属しているから、(おとなしい) 一般の生徒からは多少恐れられるというポジションを確保しただろう。加えて、少数に対する重度のいじめや不良グループによるいじめを含んだ校内暴力が社会問題化していたために、イジリや軽度のいじめの問題は、かつては潜在化していたのだろう。

といったスパイラル理論は、上記のように応用可能であり、この理解枠組みのもとで具体的かつ実践的な形でそれらの研究が発展することを、評者は大いに期待する。

参考文献

- 相原博之、2007『キャラ化するニッポン』、講談社。
- 土井隆義、2009『キャラ化する／される子どもたち—排除型社会における新たな人間像』、岩波書店。
- 原田曜平、2010『近ごろの若者はなぜダメなのか—携帯世代と「新村社会」』、光文社。
- 橋本摂子、1999「いじめ集団の類型化とその変容過程—傍観者に着目して」、『教育社会学研究』、第64号、pp. 123-142。
- 秦政春、1986「いじめの構造と学校教育病理」、『犯罪社会学研究』、11号、pp. 175-198。
- 秦政春・内藤朝雄、2004「書評（含書評に答えて）：内藤朝雄著『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』」、『ソシオロジ』、第49巻2号、pp. 121-128。
- 伊藤茂樹、2002「青年文化と学校の90年代」、『教育社会学研究』、第70号、pp. 89-103。
- 伊藤茂樹、1966「[心の問題]としてのいじめ問題」、『教育社会学研究』、第59号、pp. 21-37。
- 北山由美、2000「〈キャラクター〉のいる風景—自他の物語的理解と〈性格〉構成」、『教育社会学研究』、第67号、pp. 5-24。
- 工藤宏司、2003「書評：内藤朝雄著『いじめの社会理論—その生態学的秩序の生成と解体』」、『社会学評論』、第54巻3号、pp. 310-311。
- 間山広朗、2002「概念分析としての言説分析—「いじめ自殺」の〈根絶=解消〉へ向けて」、『教育社会学研究』、第70号、pp. 154-163。
- 宮台真司、2009『日本の難点』、幻冬舎。
- 森口朗、2007『いじめの構造』、新潮社。
- 荻上チキ、2008『ネットいじめウェブ社会と終わりなき「キャラ戦争」』、PHP 研究所。
- 新保真紀子、2008「現代のいじめ—大阪子ども調査を中心に—」、『神戸親和女子大学児童教育学研究』、第27号、pp. 24-39。
- 白岩玄、2008『野ブタ。をプロデュース』、河出書房新社。
- 竹川郁雄、2004「生徒支援の教育社会学に向けて—いじめ問題を中心として」、『教育社会学研究』、第74号、pp. 77-91。
- 滝充、1992「“いじめ”行為の発生要因に関する実証的研究—質問紙法による追跡調査データを用いた諸仮説の整理と検証』、『教育社会学研究』、第50号、pp. 366-388。
- 徳岡秀雄、1988「自己成就の予言としてのいじめ問題」、『関西大学社会学部紀要』、20巻1号、pp. 158-180。
- 山本俊麿、1985「順社会行動：「いじめ」への援助に関する心理学的研究』、『鳥根大学教育学部紀要』、19巻、pp. 69-86。

(むかい・まなぶ 博士課程前期課程)